

## 地域社会・地域問題 (2)

### 農をやめた中国農家楽山村の観光産業化と村としてのまとめ

—北京市第一民俗旅行村・G村を事例として—

宇都宮大学・閻美芳

本報告では、観光（農家楽・別荘地開発）という新たな産業を取り入れた北京市郊外の村を事例に、観光によって村に異質な秩序が持ちこまれるなか、それでもなお村としてのまとめりがどのように維持されているのか、そのメカニズムの一端を明らかにすることである。

日本でグリーン・ツーリズムが展開する前提条件として、「きちんとした農山漁村の『日常』」が営まれていることが挙げられている（池上甲一 1998）。また、グリーン・ツーリズムは各農家だけでなく、農家を束ねる「地域社会」も重要であるという指摘もある（細谷昂ほか 2005）。

しかし、中国のグリーン・ツーリズムである農家楽を考察すると、まず浮かび上がってくるのは、各農家の独立性である。中国で展開されている農家楽の初期段階（1980年代から2000年まで）の特徴は、各農家がそれぞれの創意工夫で始めたことである。後期（2000年代以降）になると、行政主導の農家楽事業が展開されるようになり、村落空間は一種のテーマパークのように扱われてしまう（桂英ほか 2010: 46）。このように、中国の中央レベルの観光・農村政策は産業育成に偏って展開されているため、農家楽を展開する地域では、観光地として経済的に成功すればそれだけ、地域社会は周辺化してしまう傾向にある（南裕子 2015: 183）。

本稿で取り上げる北京市郊外の山村G村も、各農家が創意工夫することによって農家楽に取り組み始めた村である。村びとは農家楽を「出稼ぎの代わりに産業」と位置づけ、家屋の一部を改築して農家楽を実施してきた。2004年に北京市政府、鎮政府、村行政の3者による村落空間の改造があり、農家楽を経営する農家の多くはこれを機に、水洗トイレやシャワーを取り入れた2階建ての家屋に改築した。この資金として活用されたのは、G村が村びとの農地を徴収して建設した別荘地から上がってくる収入であった。具体的には、2003年にG村では農地を50年の年限で貸出すことによってねん出した300万元の代金を、各村びとに分割して2万元ずつ配布したのである。こうしてG村の農家楽は、「農」をやめた上で村落改造を行うことで、展開されているのである。

「農」をやめたG村の改造は、各農家の独立性にさらに輪をかけた。改築した家屋の一部あるいは全部を外部の経営者に貸し出し、不在地主として鎮に移り住む村びともいた。G村のような農家楽は、日本の農山村のグリーン・ツーリズムに照射すると、グリーン・ツーリズム本来の姿よりも、都市のスーパーホテルの農山村バージョンに映られる。これは本稿で考察した中国で推進される農家楽の観光産業化の帰結であった。

しかしながら、このような行政主導の「農」をやめた観光産業化の進行が果たして村を終結に導いたといえるのだろうか。本稿では、農家楽観光業によって都市を接ぎ木されるG村での現地調査で明らかになったのは、混住化が進みつつも、村としてのまとめりが依然としてあり、そのメカニズムの一端に、村びとの「公言」があることであった。

#### 参考文献

池上甲一 「地域の農林漁業を組み直す」 21 ふるさと京都塾『人と地域をいかすグリーン・ツーリズム』、学芸出版社、1998

細谷昂・佐藤香奈 2005「グリーン・ツーリズムと地域活性化」『総合政策』第7巻第1号（2005）pp1-29.

南裕子 2015 「中国におけるグリーン・ツーリズムの展開と村民自治組織」『人文・自然研究』9 : pp165-189

桂英・橋本卓爾・藤田武弘・山尾政博・細野賢治 2010「中国四川省における農家楽を中心とした農村振興」『農村市場研究』19(2)、pp41-7